

頼朝の旗挙げと岡崎四郎義實

毎年4月の第1日曜日、湯河原町で「源頼朝旗挙げ武者行列」が勇壮に繰り広げられている。戦勝祈願した五所神社に集まり、鎧兜の面々が「音に聞くらん、目にも見よ、我こそは、□□□の□□□□なりー」と大音声で名乗りをあげ、土肥實平の館跡城願寺まで練り歩く。その行列の中に本市ゆかりの岡崎四郎義實、土屋三郎宗遠、真田与一義忠、土屋次郎義清の姿がある。

頼朝の旗挙げは中世の夜明けであり、社会の仕組みを変える雄叫びでもあった。治承4年(1180)8月17日46騎による伊豆蛭ヶ小島の旗挙げと山木の館の夜襲、300騎の石橋山の合戦、箱根山中の逃避行、真鶴町岩から主従7騎での安房猟島への船渡り、上総、下総、武蔵から相模へと進軍していくなかで関東の武士団が大挙参陣し、10月6日鎌倉入りした時は3万騎とも言われている。この史実は正に一大叙事詩である。平家に陰りが見えたとはいえ、当時平家一色の坂東にあって、よくぞ相模の三浦、中村の一族は源頼朝を未来の盟主に仰いだことだと思う。今回は歴史に身を投じた岡崎四郎義實の生き方を取り上げてみたい。

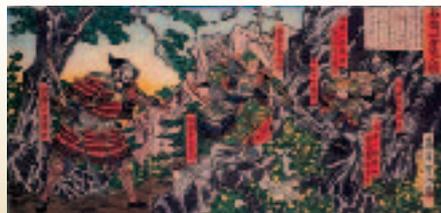
義實は平安時代の後期天永3年(1112)三浦義継の四男として生まれ三浦の悪四郎と言われていた。「悪」とは悪源太義平と同じで、猛々しく強いという意味である。中井町に居を構えた西相模の雄中村宗平の娘を妻にもらった関係からか岡崎の地に館を築いた。中村宗平の次男は土肥實平、三男は土屋宗遠であり、義實の次男義清が宗遠の養子となるなど、義實を軸に三浦と中村は深く結ばれていた。

義實は早くから伊豆蛭ヶ小島の頼朝の館に息子与一と訪れていた。頼朝が最も頼りにしていたのは坂東の雄三浦党であり、義實は兄義明との交渉役も引き受けていたのではないと思われる。またある時頼朝より土肥實平をさそって来てくれと言われている。挙兵後三浦と合流するため鎌倉に向う途中、石橋山に陣を構えた時は、敵の平家大庭景親軍3000騎に対したったの300騎であった。宵闇の篠突く雨の中、義實は武士の誉として誰もが望む先陣を「わが息子与一に」と推挙した。頼朝は「与一敵の先陣俣野景久を討ち取り高名を立てよ」と励ます。与一の奮闘と戦死の話は『たわわ』42号のとおりである。石橋山に敗れた頼朝主従は、箱根を知り尽くし智と勇の人實平の先導で箱根山中の逃避行に入った。一時義實は頼朝に「覚悟をされたい」と迫る場面もあったが、實平等とともに守り抜き、8月28日真鶴町岩から船の纜をとき安房に落ち延びる。『吾妻鏡』では前日義實等は安房へ先行したとの記述があるが、能の曲名『七騎落』では、八人で落ちるのは源氏では縁起が悪いので、實平より義實に降りると言われたのが「二つ命で仕えたが、与一亡くなり降りられん」といい、實平の長男遠平が降りたということになっている。

頼朝は鎌倉入りした翌日の10月7日父義朝の亀谷の居館跡を訪れ、義實が義朝を弔っていた小さな祠堂を荒草の中に見る。後日この地に頼朝の妻政子が壽福寺を開山している。23日には大磯町の国府(国府本郷馬場台遺蹟)にて勲功の賞があった。義實等あるものは本領を安堵、あるものは新恩に浴した。26日平家の総大将大庭景親は固瀬川(片瀬川)にて梟首。

その後、義實は鎌倉にも居を構えるとともに、宿老として奥州征伐に参陣、頼朝入洛、南都行や種々の儀式に供奉した。また、頼朝の笠懸けや酒席などに侍り、時として頼朝を自宅に招いているが、高齢ということもあり役職にはついていなかった。一本気な性格で頼朝の「水干」(脇あけの装束)を所望した時、上総介が「老いぼれでなく我こそが貰うべき」と発言した時「なにお」とあわや乱闘に、という事件もあった。このように短気な反面、与一を討った長尾定景が毎日与一の冥福を祈り法華経を上げている姿を見て、「これを誅せば与一は浮ばれぬ」といい許した慈悲の人であつたという。長尾定景は長尾景虎即ち上杉謙信の祖と言われている。

建久4年(1193)5月の富士の裾野の「大巻狩」は今日の自衛隊の「富士総合火力演習」のようなものであったと思われる。雷鳴轟く豪雨のなか曾我兄弟の仇討ちがあった。一説には「巻狩に乗じたクーデターがあったのではないか」という説がある。そのことに加担したのか義實と大庭景義はその年の8月24日同じ日に出家するなど、晩年は不遇の内に暮らし、正治2年(1200)3月4日老体に鞭打ち政子に窮状を訴えた。政子はあわれに思い將軍頼家に口添えを行ったが、その答えもまたず6月21日卒す。享年89歳。鎌倉幕府草創期の功多いなかで、報いの少ない生涯であったが、義實が頼朝に命をかけたのは、頼朝の父義朝に深く恩義を感じていたからではないかと思う。平家全盛の時代、義朝を弔い続けた坂東武者が他にいたであろうか。



稲野年恒作 石橋山の合戦之図

(岩崎宗純著『浮世絵が語る小田原』夢工房提供)



岡崎義實(岡崎公民館)



岡崎義實の墓(入山郷)

(文責 地域デザイン研究所
主宰 飯尾紀彦)



発行//平塚市(文化行政推進室)

〒254-0045 平塚市見附町15-1
<http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/>

●お問い合わせ

施設利用に関すること TEL 0463-32-2235

事業に関すること TEL 0463-32-2237

FAX 0463-31-6466

